

黙示録15章「神の憤りの前の賛美」

1A 御座の前の殉教者たち 1-4

1B 極まる憤り 1

2B モーセと子羊の歌 2-4

1C ガラスの海 2

2C 正しいさばき 3-4

2A 神殿からの災害 5-8

1B 神殿から出てきた御使い 5-6

2B 憤りが満ちた金の鉢 7-8

本文

黙示録 15 章を開いてください。私たちは、ついに主がもたらされる最後の災いを見ていきます。といっても、その災いをもたらす初めの部分です。16 章に、その災いが地上に下っていく姿を見ますが、天においてその災いを携えている御使いたちの姿を見ます。午前礼拝で学びましたが、私たちは、主を恐れかしくみつ、神が終わりの日に公正な裁きを地上にもたらすのだということを知らなければいけません。ちょうど、ノアの時代に水によって地上をさばかれたように、今度は火によって、神に反抗する世を裁かれる日を定めておられます。

これまで、主は災害を下しておられました。しかし、主はそれでもご自分の災いのすべてをすぐには下さず、抑制しておられました。それは彼らが悔い改めるかもしれないからです。前回、14 章には、御使いを遣わして永遠の福音を世界に伝えるようにされたほどです。けれども、それでも悔い改めない者たちには、永遠の滅びによって滅ぼされるのです。

1A 御座の前の殉教者たち 1-4

1B 極まる憤り 1

¹ また私は、天にもう一つの大きな驚くべきしるしを見た。七人の御使いが、最後の七つの災害を携えていた。ここに神の憤りは極まるのである。

これまでヨハネは、大きなしるしを天に現れるのを見ていました。例えば、12 章、一人の女が天に現れて、その後、赤い大きな竜が現れました。そしてここでは、「大きな驚くべきしるし」とヨハネは言っています。12 章の大きなしるしよりも、さらに大きなしるしだということです。そして、七人の御使いが、それぞれ一つの災害を持ち、合計七つの災害を携えています。それが、「最後の」災いです。

最後の七つの災害によって、「神の憤りは極まる」とあります。ここの「極まる」はギリシア語で「テレオウ τελέω」です。イエス様が十字架に付けられて死なれる直前の発せられた言葉、「完了した(ヨハネ 19:30)」はテテレスタイであります。主が、十字架の上で贖いを完了されました。救いに御業は十字架で完了したのですが、同じように、神が地上に対する裁きを完了していただきます。

次に、モーセと子羊の歌が出てきます。子羊、すなわちキリストが私たちの罪のために、ご自身が罪を負い、神の御怒りを受けてくださいました。そこに、罪の赦しがあり、そしてこの方において神の御怒りから救われます。「ロマ 5:9 ですから、今、キリストの血によって義と認められた私たちが、この方によって神の怒りから救われるのは、なおいっそう確かなことです。」

しかし、そのキリストの血を侮ったら、どうなるでしょうか？ 生ける神の手に陥るだけなのです。「ヘブル 10:29-31 まして、神の御子を踏みつけ、自分を聖なるものとした契約の血を汚れたものとなし、恵みの御霊を侮る者は、いかに重い処罰に値するかが分かるでしょう。30 私たちは、「復讐はわたしのもの、わたしが報復する。」また、「主は御民をさばかれる」と言われる方を知っています。31 生ける神の手の中に陥ることは恐ろしいことです。」

2B モーセと子羊の歌 2-4

1C ガラスの海 2

²私は、火が混じった、ガラスの海のようなものを見た。獣とその像とその名を示す数字に打ち勝った人々が、神の豎琴を手にしてガラスの海のほとりに立っていた。

ヨハネが見ている場所は、「ガラスの海のようなもの」です。これは、神の御座の前に広がっている海のようなところですが、4章における、神の御座の幻を思い出してください。「4:6 御座の前は、水晶に似た、ガラスの海のようにであった。そして、御座のあたり、御座の周りに、前もうしろも目で満ちた四つの生き物がいた。」とあります。今、この場面に戻っていますが、獣が地上で支配権を握っていたところで、神の御座は何ら影響を受けることなく、揺るがされることは全くないのです。

そして「ガラスの海」ですが、海というのは王座の前に広がっている部分で、その威光と力を示している部分です。王座と、王に向かってひれ伏す間に広がっている空間です。神と、礼拝している者たちの間に、これが広がっています。その海が「ガラス」になっています。神にはしみも汚れもない、全く清い方であることを示しています。新しい天のエルサレムが、透き通っていることが書かれています(21:11)。

4章とここ 15章の違いは、「火が混じった」ガラスの海だとしています。これは、地上に神の御怒りの火がくだるので、その火が反射されて光っているのです。

そこに、「獣とその像とその名を示す数字に打ち勝った人々」がいます！13章において、イエスの証しを保っていた人たちです。彼らはその信仰のゆえに、獣を拝むこと、その名前の刻印を押されることを拒みました。それで殺されています。13章には、「13:7 獣は、聖徒たちに戦いを挑んで打ち勝つことが許された。」とありました。地上において、獣が打ち勝っているようにされていました。しかし、それは敗北では全くありません。実は、打ち勝っていたのです。地においては打ち負かされましたが、彼らに用意されていたのは、天です。

主が弟子たちに言われました。「ルカ 12:4-5 わたしの友であるあなたがたに言います。からだを殺しても、その後はもう何もできない者たちを恐れてはいけません。5 恐れなければならない方を、あなたがたに教えてあげましょう。殺した後で、ゲヘナに投げ込む権威を持っておられる方を恐れなさい。そうです。あなたがたに言います。この方を恐れなさい。」この世で福音のゆえにいのちを失ったら、むしろそれを救うのです。

そして、彼らが「神の豎琴を手にして」います。黙示録 5章において、四つの生き物と二十四人の長老が、「5:8 …子羊の前にひれ伏した。彼らはそれぞれ、豎琴と、香に満ちた金の鉢を持っていた。香は聖徒たちの祈りであった。」とあります。その御前にいる天の存在が豎琴を持っているように、今、獣の国から救い出された者たちも持っています。14章においても、十四万四千人が新しい歌をうたっている中で、天からの声は、「14:2 また、私は天からの声を聞いた。それは大水のとどろきのようにあり、激しい雷鳴のようでもあった。しかも、私が聞いたその声は、豎琴を弾く人たちが豎琴に合わせて歌う声のようであった。」とありましたね。

そして、「ガラスの海のほとりに立っていた」と言っています。なぜ、海のほとりなのか？一つは、御座と礼拝者を隔てるのが、海です。もう一つの意味は、3節を読むと分かります。

2C 正しいさばき 3-4

^{3a} 彼らは神のしもべモーセの歌と子羊の歌を歌った。

彼らは、モーセの歌を歌っています。そしてそれは、子羊の歌でもあります。どういうことでしょうか？出エジプト記 15章から来ています。主が、イスラエルの民をエジプトから連れ出してくださいました。紅海を分けてくださり、そこをイスラエルの民が歩きました。エジプトの戦車は追いかけていきました。民が全て渡り終わって、モーセが海に手を差し伸べます。すると、水が戻りました。そして、イスラエルは海辺に死んでいるエジプト人を見たのです。その後、モーセとイスラエル人が歌を歌いました。「15:1-2・【主】に向かって私は歌おう。主はご威光を極みまで現され、馬と乗り手を海の中に投げ込まれた。2【主】は私の力、また、ほめ歌。主は私の救いとなられた。この方こそ、私の神。私はこの方をほめたたえる。私の父の神。この方を私はあがめる。」

つまり神は、エジプトを滅ぼされることによって、イスラエルを救われました。紅海の向こう岸に渡らせて、エジプトを海の中に沈めました。それと同じように、今、天と地で行われているのです。獣を拝むのを拒んだ者たちは、天という向こう岸にいます。そして、地上の獣国はいわば、分かれた海の中にいます。そして、海が戻ってエジプト軍を滅ぼされたように、今、神は、聖徒たちのいなくなった獣の国を、火を持って滅ぼされるのです。したがって、出エジプトは、子羊であるキリストによって、その流された血によって私たちを今の世から救われることを、示している型になっています。ですから、彼らは小羊によって救われているのですが、出エジプトがその救いを表しているものとして、モーセの歌も加えられているのです。

^{3b}「主よ、全能者なる神よ。あなたのみわざは偉大で、驚くべきものです。諸国の民の王よ。あなたの道は正しく真実です。」

彼らの歌の内容です。神が全能者であることを歌っています。そして、神の驚くべきわざを歌っています。この歌の内容は、詩篇には数多く出てくるものです。特に 86 篇 9-10 節の内容と同じです。「9 主よ あなたが造られたすべての国々はあなたの御前に来て伏し拝み あなたの御名をあげます。10 まことにあなたは大いなる方 奇しみわざを行われる方。あなただけが神です。」この方のなされるわざがあまりにも驚くべきことであり、偉大なので、すべての国々が御前で伏し拝むようになるということです。それぞれの国はそれぞれの神を持っています。けれども、イスラエルの神は、全地の主、すべての国々の王です。

イザヤも、主なる神が地上を揺るがして、それゆえ、あらゆる国々で、主がほめたたえられている姿を預言しています。24 章の始まりは、「主は地を荒れ果てさせ、その面をくつがえして、住民を散らされる。(1 節)」とあります。地の面をくつがえすのですから、それはイスラエルの神だとかそんなではなく、どんな国々にも影響を与えるのです。ですから、主によって贖い出された、諸国の民が、これらのことをされる方に、賛美を献げています。「24:14-16 彼らは声をあげて喜び歌い、西の方から【主】の威光をたたえて叫ぶ。15 それゆえ、東の国々で【主】をあげめよ。西の島々で、イスラエルの神、【主】の御名を。16a 地の果てから、私たちは、「正しい方に誉れあれ」というほめ歌を聞く。」

そして、彼らが次にほめたたえているのは、神の道です。「あなたの道は正しく真実です。」今、引用したイザヤの預言にも、「正しい方に誉れあれ」とありますね。その道が正しく、真実です。午前礼拝でお話したように、主がこれから下される災いに対して、天においては正しい方、真実な方だとしてほめたたえているのです。私たちは、今はいろいろ不条理なことを見ます。また、理解できないことがどんどん起こります。しかし、主は正しい方で、必ず悪に対しては悪で報いられます。「ロマ 2:6-8 神は、一人ひとり、その人の行いに応じて報いられます。7 忍耐をもって善を行い、栄光と誉れと朽ちないものを求める者には、永遠のいのちを与え、8 利己的な思いから真理に従

わず、不義に従う者には、怒りと憤りを下されます。」

⁴ 主よ、あなたを恐れず、御名をあがめない者がいるでしょうか。あなただけが聖なる方です。すべての国々の民は来て、あなたの御前にひれ伏します。あなたの正しいさばきが 明らかにされたからです。」

次に、彼らが歌っているのは、主が恐れられるべきお方であること、そしてその御名をあがめることです。「あなたを恐れず、御名をあがめない者がいるでしょうか」と言っています。同じく詩篇では、あらゆる国々で恐れられることを歌っています。詩 96 篇 1-6 節を読みます。

- 1 新しい歌を【主】に歌え。全地よ【主】に歌え。
- 2 【主】に歌え。御名をほめたたえよ。日から日へと御救いの良い知らせを告げよ。
- 3 主の栄光を国々の間で語り告げよ。その奇しいみわざをあらゆる民の間で。
- 4 まことに【主】は大いなる方大いに賛美される方。すべての神々にまさって恐れられる方だ。
- 5 まことにどの民の神々もみな偽りだ。しかし【主】は天をお造りになった。
- 6 威厳と威光は御前にあり力と輝きは主の聖所にある。

新約聖書でも、御名があらゆる人に恐れられることを教えています。そのあがめられるべき御名は、イエスの名です。この方が十字架の苦しみを味わい、それから死者の中からよみがえられたことにより、この方こそが主であることが明らかにされました。「ピリ 2:10-11 それは、イエスの名によって、天にあるもの、地にあるもの、地の下にあるものすべてが膝をかがめ、11 すべての舌が「イエス・キリストは主です」と告白して、父なる神に栄光を帰するためです。」

そして主のみが、「聖なる方」です。どんな被造物からも別たれておられます。ゆえに、神の栄光を自分たちと混ぜ合わせている獣の国に対して、火をもって清め、取り除かなければいけません。

そして「すべての国々の民は来て、あなたの御前にひれ伏します。」とあります。これが、終わりの日の幻です。詩篇にも預言者にも、そしてイエスにあって新約聖書にも啓示されている、終わりの日の幻です。みなさんも、世界にいる兄弟姉妹と共に賛美する時があるとよいです。そこで、私たちは天の姿、また終わりの日の姿を少し、見ることができるのです。

間もなく、東アジア青年キリスト者大会がありますが、そこでは東アジアの三国からの兄弟姉妹が、それぞれの言語で同じ賛美を歌います。イスラエルに行かれるのもよいでしょう。主がよみがえられた園の墓には、あらゆる国のキリスト者たちが来て、そこで賛美し、聖餐式を執り行っています。もし、そのような機会がなかったら、ユーチューブでも数多く、いろいろな国の兄弟たちが賛美している姿を見ることができます。「いいえ、私は自分がイエスを賛美しているだけで結構です。」

日本語だけで結構です。」と言われたら、賛美の喜びは半減します。なぜなら、主は、あらゆる国々の民によって、ほめたたえられるべき方、畏れ多い方だからです。

2A 神殿からの災害 5-8

そして5節から、七人の御使いが出てくる場面が登場します。

1B 神殿から出てきた御使い 5-6

⁵ その後、私は見た。天にある、あかしの幕屋である神殿が開かれた。⁶ そして七人の御使いが、七つの災害を携えて神殿から出て来た。彼らは、きよく光り輝く亜麻布を着て、胸には金の帯を締めていた。

ラッパによる七つの災害の時のことを思い出してください。「8:2-5 それから私は、神の御前に立っている七人の御使いたちを見た。彼らに七つのラッパが与えられた。3 また、別の御使いが来て、金の香炉を持って祭壇のそばに立った。すると、たくさんの香が彼に与えられた。すべての聖徒たちの祈りに添えて、御座の前にある金の祭壇の上で献げるためであった。4 香の煙は、聖徒たちの祈りとともに、御使いの手から神の御前に立ち上った。5 それから御使いは、その香炉を取り、それを祭壇の火で満たしてから地に投げつけた。すると、雷鳴と声がとどろき、稲妻がひらめき、地震が起こった。」このようにして、七つのラッパによる災いの時は、金の香壇からの火による災いでした。

しかし、ここは違います。「あかしの幕屋である神殿」です。11章19節を見ると、もっと具体的には、至聖所にある契約の箱からです。「それから、天にある神の神殿が開かれ、神の契約の箱が神殿の中に見えた。すると稲妻がひらめき、雷鳴がとどろき、地震が起こり、大粒の雹が降った。」香壇は、至聖所と聖所を仕切る垂れ幕に接する形で置かれています。しかし、契約の箱は、その垂れ幕の中にあります。契約の箱の上に宥めの蓋が置かれており、ケルビムが彫られています。そのケルビムの間から、主は語られます。そこに主の御座があることを示しているからです。そこから、七人の御使いが出てくるのです。つまり、聖なる方が直に、御怒りを示されるということです。

第七のラッパが吹き鳴らされて、それで七人の御使いが同じように立っています。地上にある幕屋や神殿は、天にある実体の模型であり、影であることを、私たちはヘブル書から知っていますし、この8章の学びの時に学びました。ただここでは違う点があります。第七の封印が解かれた時、これらの御使いは御座の前に立っているだけです。

けれども、この第七のラッパが吹き鳴らされた後に、七人の御使いは聖所そのものから出てきています。11章の最後には、契約の箱が見えるほどですから、至聖所のところから出てきているような形になっています。主の聖なるご臨在と栄光から、直接、これらの災いが下るのです。分

かり易くするために、たとえば、日本の中でアメリカ人が問題に巻き込まれたとします。そこで大使館の職員が現れました。それでも埒があきません。それで大使自身がやってきます。それでも、言うことを聞きません。それで、そのアメリカ人のために、米国から国務長官がやってきます。それでも言うことを聞きません。それで、大統領自身がやって来る、という具合です。権力者自身が、ここで力を示す、というような状況です。

そして、「きよく光り輝く亜麻布を着て、胸には金の帯を締めていた。」とあります。まるでイエスご自身であるかのような輝きです。ヨハネが、イエスにあった時の、この方の姿を思い出してください。「1:13 また、その燭台の真ん中に、人の子のような方が見えた。その方は、足まで垂れた衣をまとい、胸に金の帯を締めていた。」なぜなら、至聖所のところから御使いが出て来ているからです。神のすぐそばにいたために、主の栄光と聖さ、その力が反映して輝いているのです。モーセが主と語ってその顔が輝いていたように、御使いの着ている物も光輝いています。

そして亜麻布は、祭司の装束、神と人との仲介者としての働きを示しています。金の帯は、神の栄光を持つ使者としての働きを示しています。

2B 憤りが満ちた金の鉢 7-8

⁷ また、四つの生き物の一つが、七人の御使いたちに七つの金の鉢を渡したが、それには世々限りなく生きておられる神の憤りが満ちていた。

神の御座のところには、四つの生き物がいることを思い出してください。その一つから、御使いたちが金の鉢を受け取ります。それは、「世々限りなく生きておられる神の憤り」であるとあります。神の御怒り、しかも永遠に生きておられる神の御怒りです。すべての時代を超えて、生きておられる方が裁かれます。そして既に 14 章でそれがどういふことなのかを読みました。「14:10-11 その者は、神の怒りの杯に混ぜ物なしに注がれた、神の憤りのぶどう酒を飲み、聖なる御使いたちと子羊の前で火と硫黄によって苦しめられる。彼らの苦しみの煙は、世々限りなく立ち上る。獣とその像を拝む者たち、また、だれでも獣の名の刻印を受ける者には、昼も夜も安らぎがない。」

⁸ 神殿は、神の栄光とその御力から立ち上る煙で満たされ、七人の御使いたちの七つの災害が終わるまでは、だれもその神殿に入ることができなかった。

聖所が煙で満たされているということですが、それは神の栄光と大能のゆえであるとあります。地上の幕屋でこのことが起こりましたね。民が荒野で幕屋の用具を造りました。最後に、モーセが組み立てました。「出エジプト 40:34-35 そのとき、雲が会見の天幕をおおい、【主】の栄光が幕屋に満ちた。モーセは会見の天幕に入ることができなかった。雲がその上にとどまり、【主】の栄光が幕屋に満ちていたからである。」そしてソロモンが神殿を建てた時も同じです。「1列王 8:10-11 祭

司たちが聖所から出て来たとき、雲が【主】の宮に満ちた。祭司たちは、その雲のために、立って仕えることができなかった。【主】の栄光が【主】の宮に満ちたからである。」主の栄光を前にしては、だれもそこに立ち入ることができない状態です。

つまり、16章から見る七つの災いは、神の聖さ、正しさ、栄光と力を表すものだということです。それは単に苦痛を表すものではなく、私たちはただ神を恐れかしこみ、この方のさばきにひれ伏すような、聖さ、正しさがあります。私たちは、正しさについて喧々諤々、自分の意見を言う時代に生きています。けれども、いつか、すべての正しさ、聖さを持っておられる主ご自身が現れ、さばきを行われます。その時には、だれもが口を挟むことなく、ただひれ伏すのみなのです。私たちは、御霊によって、その訓練を受けていると言ってよいでしょう。自分の抱いている正しさではなく、ただ偉大な神、力ある神、聖なる方、正しく真実な方の前でひれ伏すのです。

主は、ゼカリヤによって言われました。「2:13 すべての肉なる者よ、【主】の前で静まれ。主が聖なる御住まいから立ち上がられるからだ。」